

乳・幼年期における音楽教育 (7)

——主体性・個性を生かす「音楽」の指導過程—— 井上 徳雄

(九州女子短期大学)

1. 研究目的

「乳・幼年期」(乳児から小学校1～2年まで)の音楽教育で、それぞれの乳・幼児、児童の主体性や個性を伸長させるには、どのような指導の内容や過程を考慮すればよいか、実践的な立場から究明する。

2. 研究目的設定の基盤

(1) 乳・幼年期の音楽教育は、家庭や幼稚園、保育所(園)、小学校(以下「幼保・小」等略語で表す)、民間の音楽教室等で行われることが多いが、特に、「幼保・小」では、一斉的、集団的な指導形態や方法をとることが多い。

(2) 又、音楽会や発表会、コンクール、パレードなどのイベントを目標にした指導には、結果的な出来栄を前提とした指導が行われやすい。

(3) 一方、民間で行われている、いわゆる「音楽教室」や個人指導等は、それなりの成果をあげているが、これと「幼保・小」での日常的な音楽活動との関係が問題になる。

(4) 音楽活動は、所詮は子ども一人ひとりの個性に応じた感性や創造性の習得が基本になるが、これが現実の「幼保・小」の日常的な指導過程のなかで、どのように獲得され、どのように指導されているかの実証と反省が必要になる。

(5) 幼稚園教育要領や小学校学習指導要領では、「安定した情緒の下で自己を十分に発揮する」「幼児の主体的な活動を促し」「幼児の一人ひとりの特性に応じ発達の課題に即した指導を——」(幼稚園教育要領の「幼稚園教育の基本」の項)(…は筆者)「児童の個性的な発想を生かした表現をさせ——」(小学校学習指導要領「音楽科」第3指導計画の作成と各学年にわたる内容の扱い(5))が示すように、主体的、個性的な取扱いを強調している。

(6) もともと、音楽の「楽しさ」「美しさ」は、それぞれの年齢や発達段階、環境等によって、その子どもなりの個性に応じて、主体的に感得されていく。

(7) 音楽指導のなかで、一人ひとりの子どもの特性をどう発見し伸長させるか、当然、そこには「評価」の問題が生起するが、これ等を含めて、音楽教育の改善と前進を意図する必要がある。

3. 研究計画と方法

(1) 「幼保・小」の「音楽」の「指導過程」で、子どもの「主体性・個性」を生かす指導が、どのように考え、行われているか。その実態や問題点をさぐる。

(2) 「幼保」の音楽活動、特に、「歌う」「動く」「ひく(くならず)」等、表現の特質に応じた「主体性・個性」の考え方や、その指導のあり方を究明する。

(3) 「幼保・小」でよく行われている「音楽」に関連した行幸(音楽会、発表会、対外的な音楽的行事等)への参加のための指導内容、特に日常の保育(指導)との関係や曲目の選定、練習時間や方法、子どもの反応、指導者の意見等について考察する。

(4) 民間の音楽教室等での参加経験をもつ子ども達の「幼保・小」の日常的な「音楽活動」とのかかわりについて、その状況や問題点等を検討する。

(5) 「幼保・小」での日常的な「音楽」の「指導過程」のなかで、一人ひとりの子どもを、どうとらえ、どう伸ばすかについて、その内容、方法等を具体的に究明する。——等である。

4. 研究の内容と考察

「幼保・小」の音楽の「指導過程」で、主体性・個性を生かす指導について、主として、(1)これを阻む要因と、(2)これを生かす「指導過程とその方法」に要約して述べる。

(1) 主体性・個性を阻む要因

ア. 音楽活動の「特性」から ——

(ア) 「歌唱」「動き」「器楽」等の表現で、他の子どもと比較され、個人差が見えやすい。

(イ) 保育や教師、指導者(以下「教師等」と呼ぶ)が、予想される子どもの活動や「指導目標(ねらい)」をあげ、これに、一斉的に近づけようとする。

(ウ) 指導される「歌曲」(歌詞内容等)に、子どもの既有経験や愛好度、表現技能や態度等に、個人差が見られる。

(エ) 特定の「歌曲」が孤立して指導され、他の歌曲や生活、季節、行事等との連携が稀薄な場合がある。

(オ) 特に「器楽」の指導については、楽器の保管や音響等の関係から、行事参加等を目標にした演奏が中心になりやすい。——等である。

イ. 「音楽」の指導形態の面から ——

(ア) クラスの人数によっては、個人的な指導ができていく場合がある。

(イ) とすると、一斉的な「表現」の指導に終りがちになる。特に、発表会、音楽会などイベント参加を目標にした指導には、幼児や児童の主体性、個性への配慮が行き届かないこともある。

(ウ) 部分的な練習(グループや個人指導)の場合、他の子どもの動静などが気になる。

(エ) 各種の民間の音楽塾などで受けている個人指導の成果が、「幼保・小」の日常的な音楽活動の内容や方法と離れがちである。

(2) 主体性・個性を生かす指導過程とその方法

「指導過程」を、一応、①「導入段階」②「中心的習得段階」、③「整理・発展」の段階に区分して、以下、その指導の概略を述べる。

① 「導入段階」で、主体性・個性を生かす指導——

ア 教師等や幼児・児童、音楽的環境等のなかで、自然に誘発される活動から導入する。(※(ア)(イ)(ウ)は具体例)

(ア) 「うたあそび」※(はないちもんめ) など

(イ) 「音楽会ごっこ」※(子ども達の自主的な)

(ウ) オルガンのさぐり弾き「遊び」などから——

(エ) 季節、行事、遊びや生活等に関連する「歌曲」などから導入する。

(オ) 童話、寓話等、空想的な楽しさをもつ歌曲から導入する。(個人差、性差、年齢差等がある場合は、それに適合しながら、自然に導入する。)

(カ) テレビ、レコード、絵本等で親しんだ歌曲等があれば、その状況に応じて取り上げる。

イ. この段階での指導上の留意点

(ア) 子ども一人ひとりの経験や表現意欲を、常に先行させ、これを契機に導入(誘導)していく。

(イ) 当然、個人差(興味関心、経験度、習熟度等)が大きい。これに適合する指導を行う。

(ウ) 表情や態度、言動、交友関係等をみながら、グループや全体の指導に生かす。

(エ) 個人的な評価や記録等が必要である。客観的、流動的にとらえ、今後の指導の参考にする。

(オ) これから重点的に取り上げようとする「歌曲」等への興味や意欲等が、多くの子ども達に見られるようであれば、自然に次の②の段階へ移行する。

② 「中心的習得段階」での主体性・個性を生かす指導 ——

ア 歌詞や楽曲等が、一人ひとりに、次第に主体的に習得され、定着していく。

(ア) 範唱や範奏、レコード、友だちの歌声などを、聞いたり、一しょに歌ったり動いたりする。

(イ) 歌詞と楽曲を、個性的に表現する。(※自己表現の進展)

(ウ) 友だちとの交流のなかで、次第に習熟する。

(エ) 絵や写真、絵譜など見て歌う。(※音楽経験の拡大)

(オ) 一人ひとりの個性に応じた表現ができる。

(※歌詞内容等が、個性的にイメージ化する)

(カ) 教師等の指示を自分なりに受けとめる。

イ. この段階での指導上の留意点

(ア) 教師等の範唱(奏)、動きなどを、曲想を生かして、楽しく(正しく、美しく)愛情こめて行う。

(イ) 一斉やグループのなかに教師等も入り、子ども達と行動を共にしながら、観察や評価を行う。

(ウ) できるだけ、子どもの「個人」を生かす機会(場)を作る。

(エ) 承認、賞賛、奨励、助言・助力等を、個人やグループ、全員に対して行う。

(オ) 子どもの一人ひとりの意欲や表現力等に応じて、次の目標(活動)へ指向させる。

③ 「整理・発展」の段階での主体性、個性を生かす指導 ——

ア 個性に応じた充足感を味わわせ、自信と意欲をかめながら、今後の指導につなぐ。

(ア) 一しょに表現したりして「仕上げ」を楽しむ。

(イ) 友だちと劇化したりして、「創作」を楽しむ。

(ウ) 好きな既習歌曲などを歌って愛好曲を広げる。

イ. この段階での指導上の留意点

(ア) 個性、個人差に応じた表現への意欲や態度、獲得した音楽的な基礎基本等を評価し、今後に生かす。

(イ) 必要によっては、個人指導の機会を別に作る。

(ウ) 「音楽」だけでなく個性に応じた表現をさせる。

5. 総括と課題

以上、乳・幼年期における音楽教育で、特に「幼保・小」を中心に、指導過程を、一応、①導入、②中心、③整理・発展の各段階に区分し、その過程で、子ども達の主体性や個性をどう生かし育てるかについて、概略述べて来た。「音楽活動」が、一斉的、技能的な教師中心の指導に終りがちな現状のなかで、子どもの「主体性」「個性」をどう生かすかの模索の一端である。もちろん、指導過程(①、②、③)は弾力的、一連的で分切できない面もある。又、幼小時にきびしい特訓を受け、それを現在では感謝していると言う人の例など、子どもの個性(才能)をどう伸ばすか等の問題提起もある。今後、更に、実際面の検討を続けたい。